

樋口大悟さんへのインタビュー

余すところなくお届けします！

Q どのような思いで映画
「みんな生きている～二つ目の誕生日～」を作成されましたか？

A 映画は、僕の実体験をもとにしています。
骨髄バンクやドナーさんがいなければこの世にいないくて、20年近く前に消えていた命で、その命が今ここにあることを知ってほしい。同じ病気で亡くなった方もたくさん見ていて、ドナーさんがいれば助かったかもしれないと思うと、誰かの命に繋がってほしいと思って。
あとはドナーさんへの感謝です。
名前も顔もわからないけど、手紙を1往復だけできました。
映画を作ったらどこかで見てくれるかと思って。映画の最後の「ありがとうございました」はシンプルにドナーさんへの感謝。劇場に座って見ていることを想像してます。
あと、今こうやって映画で主演をすることができているから、みんなにも希望を持ってほしいです。

Q 映画を作成してみて思い返したことはありますか？

A 映画は、2023年の夏に3週間で撮影して、企画は今から7～8年前。誰かに頼まれたわけではなくて、自分で作りたくて企画したのでお金も人もなくて。「俺が作りたい、俺が伝えたい」完成して公開して、劇場で誰かに見てもらえていることに改めて感謝します。
一時退院で劇場に見に来てくれた方がいて、不安だったけど元気になった僕を見て勇気をもらったというコメントをもらったり、この映画で骨髄バンクに登録したという声もあって、作ってよかったなと年々思われます。たくさんの人たちのおかげで映画を作ることができて、感謝の気持ちがあります。

Q

白血病の治療中、辛かったことはなんですか？

A

下痢と吐き気、43度の発熱が1週間続いたり、口の中に潰瘍ができて狂いそうなくらい痛かったです。生きるのを諦めそうになりました。

肉体的にも辛かったけど、自分が忘れられてしまうのではないかということが一番怖かったです。アクション俳優を目指し始めた頃だったので、当時一緒だった人がテレビに出てきたり、普通の友達も社会に出て仕事をしています。でも自分はずっと病院の中にいる。

自分が忘れられる、消えてしまうんじゃないかという精神的な面も辛かったです。

Q

自分以外の人のがん細胞が自分の身体に入るという経験をしたことがないので、どんな感触なのかが気になります。

実際にドナーさんからのがん細胞が樋口さんの身体に入ってきた時はどんなふうに感じましたか？

A

冷たいものが体に入ってきてだんだんそれが消えていくような、例えるなら冷たいジュースを飲んだ時みたいな、なんだか不思議な感じでした。

女性のがん細胞をもらって、血液をつくる工場ごと入れ替えたので染色体もXXになり、髪の毛が柔らかくなりました。



白血病の治療は、肉体的な負担だけでなく、精神的な負担も大きいんだね



Q

白血病になる前となった後で変わったことや骨髄移植をしてから変わったことはありますか？

A

病気してからすごく当たり前のことだけど、「人って死ぬんだな」って思いました。昨日まで隣の隣にいた人がいなくなってしまうこともありました。

あとは人に伝えるようになりました。明日いなくなっちゃうかもと思って。親とか友達とかとけんかしても電話して謝ったり、思ったことは伝えるようになりました。

人に優しくもなりましたね。当時スポーツジムのインストラクターをやりながらアクション映画の俳優をやっていて、「なんでこんなことできないの？」と思っていましたが、退院してから階段で2階にあがるのに1時間かかるとか、足の筋肉がプルプルしちゃって立てなくなったりして、人はできないものはできないんだなと思いました。

自分が違う立場になって考えられることが変わりましたね。

Q

抗がん剤治療は髪の毛が抜けてしまったり、吐き気や嘔吐といった副作用でとても辛いと聞きます。

看護師のどんな声かけや援助が嬉しかったですか？

(看護師を目指しているので知りたいです。)

A

母も看護師です。だいぶ助けられた。母が知識があったからあたふたせず大丈夫だから！と言ってくれた。最初に行った病院で、口の中の潰瘍について歯のせいだと言われたけど、原因が別にあるのではないかと母は思っていて転院したことで助かりました。

入院していたときずっと無菌室の個室の中で孤独な自分のために、当時新米の看護師さんと二人で当時流行っていたお笑い芸人の真似とかをしました。今でも仲がいいし、今回映画で看護の監修もしてもらいました。

患者さんにもいろんなタイプがありますが、僕はいてくれてよかったと思いました。看護師は素晴らしい職業だと思います。

Q

治療において、回復したりまた症状が現れたり
“寛解と再発”の繰り返しだったと思います。
どのように乗り越えたのですか？
また、その頻度や波は樋口さんの場合どうでしたか？

A

日常生活をできていた3年間は辛かったです。
寝て起きて夢だったらいいのになと思っていました。
ドナーが見つかって成功するのはその半分…寿命があるなら教
えてほしいなと思っていました。
今思い返すとしんどかったですね。

Q

白血病が治り社会復帰する際の辛かったこと、大変だったこ
とはありますか？

A

人のものをもらうので、免疫力がゼロになったため予防接
種をしたり、アレルギーを引き継いだり。免疫力0の状態なの
で、お風呂掃除しないで、ほこりを吸わないでとか言われまし
た。
放射線治療、抗がん剤をしているので皮膚がんになりやすいか
ら、日傘をさしたり、フードを被っていました。当時は男性が
日傘というのは注目されましたね。
俳優として、「川に飛び込んで」と言われても免疫が低いので
どこまでできるのかとか、切り傷作らないようにとか、特殊な
仕事をしているので…(できることを)先生と相談したり。
風疹やインフルエンザにもかかりました。
みんな「元気になってよかったね」というんだけど、それなり
に生きていくためにお金はかかるしどうしようかと考えたり。
免疫力が弱いことは目に見えない、難病指定はされないけどつ
けるマークなどもないから。

Q 病院で入院された方は、退院後も同じような食事を続けることが再発予防につながると聞いたことがあります。退院された後は食事に気を配っていますか？

A 火を通したりしてました。人のものをもらったことで、元の自分の免疫がそれを攻撃しないように免疫抑制剤を飲んでいました。その頃はグレープフルーツ系や生ものは控えていました。今はそこまで気を使っていないです。お酒も飲んでます。移植前はお酒はあんまり好きじゃなかったのも、ドナーさんがお酒好きだったのかな？と思っています。僕自身は食事に対する制限はしていません。みんなだんだん元の食事に戻っているみたいですね。

Q 映画の中で闘病中でも空手をやりたいという強い気持ちが伝わってきました。

白血病が治られた今でも空手は続けていますか？

A 今でもやっています。6歳からやっています。痛いし上には上がいて、大学生で一回やめてしまったけど、今は子供たちに教えたりしています。週に2回程。本当に空手をやっていて良かった。無菌室に入っていて夜中に目が覚めると心電図の音だけになっていて、明日自分が生きていないかもしれないと、不安になったりしました。母親に電話をして中1くらいの時の黒帯を持ってきてもらって、ロッカーに入れてあの時に比べたら頑張れるなと見たり。だから、夜中に目が覚めたときはその黒帯を握っていました。今は選手ではないから頑張り方は違うけど、やっていてよかったと思います。空手には感謝しています。

Q

輸血したからこそやってみたいことはありますか？

A

そもそも献血がなければ、僕は骨髄移植まで辿りつかなかったんだなということを考えさせられて、発信していきたいと思いました。

Q

輸血前後で献血に対するイメージはどのように変わりましたか？

A

僕めっちゃくちゃ健康体で、血が苦手で、献血を自分からしようということではなくて、でも病気になってもらう側になって改めて大事なものだなと実感しました。多分100人以上からもらっています。他人事だと思っていたことが自分のことに変わった感覚です。

Q

今の若い世代の献血者数は減少傾向にありますが、若い人に献血についてメッセージを送るとしたらどんな言葉を送りますか？

A

皆さんの力が必要だ、興味を持ってほしい。どこで誰が病気とか事故にあったかわからなくて、どこかで誰かが誰かに支えられています。それをわかりやすく形にしているものが献血です。きっと誰かが誰かのことを思っているし、支えているという感覚を少しでも感じてもらえると嬉しいです。今までこうしておけばよかったとか、それができるうちにやっておけばよかったと思います。

Q

今後チャレンジしたいことはありますか？

A

生きているうちに映画を3本作りたいなと思っています。
2作目はオファーをいただいて作って、3作品目はアクションが
好きなので、そういうのを作りたいですね。

Q

高校生に伝えたいことはありますか？

A

生きていると必ず「ピンチ」はやってくるけど、自分が一生
懸命やったことは必ず返ってくる。
僕にとっては空手、なにか、とにかく若いうちに一生懸命やってほ
しい

インタビューを終えて

●JRC部員 Rちゃん

骨髄が変わることで体質が変わってしまうことや免
疫がゼロになってしまうことなど、私が白血病につ
いて少し調べたときには載っていなくて、経験者に
しか分からないことだったため、貴重な話を聞けた
なと思いました。



●JRC部 Sちゃん

免疫がゼロになるから予防接種をすること
やドナーさんのアレルギーを引き継ぐこと
は全く知らなかったのが驚きました。

●JRC部 Kちゃん

実際に樋口さんにインタビューをしてみて、移植や
輸血について「知っているつもり」になっていた自
分に気づきました。
医学的な変化だけでなく、その裏にある人間のつな
がりや命の重みを強く感じました。

樋口大悟さん ご協力ありがとうございました。